
Dybbuk - ディバック -

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D y b b u k - デイバック -

【Nコード】

N 6 9 3 9 R

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*出会ったそいつはD y b b u k - デイバック - (悪霊)と呼ばれていた。悪霊だって？ とんでもない！ そんな生やさしい奴なんかじゃない。 < S F コメディ >

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

きままな旅行者たち

「おい！ シルヴィ。こっちこっち」

「……子どもか」

腰まである銀髪を乱暴に流しその青年は呆れて大声で呼ぶ友人を見つめた。

銀髪の青年はシルヴェスタ・アークサルド。25歳の178？。緑の瞳にスラリとした体型の地球人。左の横髪にアメジストの髪飾りを付けている。

友人の名はディラン・ウォレストマン。25歳の176？。赤茶色の髪と青い瞳。クリツとした目の大きな可愛い顔立ちをしている地球人。

宇宙歴3054年——地球に住む人類は母星を飛び出しその勢力を拡げていた。

多くの異星人と交流を重ね、地球人は繁栄し続けている。

*ちよつと聞いて

シルヴィと呼ばれた青年は電子機器を狂わせる能力『ストライダー』であると同時に、今で言う霊能力者や超能力者という意味の『エナジー・ブレイン』でもある。

その見事な銀の髪と名前から『白銀』という通り名が付けられている。その能力を使い彼はいわゆる『なんでも屋』をしているのだ。デイランは元・銀河連邦員である。軍部特務課に所属していた。『ちよつとした事』で銀河連邦を辞め、今は白銀シルヴィと行動を共にしているのだ。

地球人類の統合組織『銀河連邦』——この広い銀河系で円滑に事を運ぶためには組織は必要不可欠である。

「ほつほつ。若者は元気が一番じゃ」

「言ってくれ」

老齡のトカゲ人間——もとい、スナイプ人のナナン・セリオルはデイランの姿に緑色の顔を緩ませる。

縮んだ身長を伸ばすように軽く腰を2、3度叩くと持っていた杖をコン……と地面に突いた。

「彼はいつも元気ハツラツですね」

ナナンの隣で、その老人を守るようにそびえるトカゲ人間——もとい、スナイプ人のリヤムカ。

屈強な体に強い意志。スナイプ人は生まれつきの『エナジー・ブレイン』だ。

その力をより良く使うべく、己が師と決めたスナイプ人と寝食を共にする。彼らは基本的に髪の色は白髪なのだ。時折、金色の髪の者もいる。

因みにリヤムカの髪の色は緑がかった金髪だ。

「待ってくれよう。おいらを置いてくなつてば」

疲れたように走ってくるのは『ゴーレム』という言葉がよく似合

う少年。名はエイルクという。

カーセドニツク星の人間だ。半鉾石の体を持ちその体の構造物質から地位を決められてしまう。

つまり生まれながらに地位が決まってしまうていて地球でいう『カースト制度』と似たような社会制度を持っている。

少年は最下層の地位である『ダート』。そんな自分が嫌で、いつもこの星から出たいと夢見ていた。

——という一行が観光惑星に来ていた。どう考えたってこの一行は怪しさ爆発だ。彼らの出会いはとても数奇で運命的とも言える。

全てはシルヴィから始まった。否、彼の両親から始まった事である。彼の父親は『天使』なのだ。それも特別、特殊な……

『ルシフェル』もしくは『ルシファー』をご存じだろうか。

そう、神に反乱を企て地獄に墮とされた天使の名だ。もともとは天使の階級の名であったが今では彼の名となっている。

墮天した後は『ルシファー・サタン』などとも呼ばれる。そのルシフェルがいた位階に就いたのが彼の父親だった。

しかし——その天使はシルヴィの母親を愛し、またもやその位階の天使は神を裏切った事になる。

ナナンは実は元天使だったのだ。数千年前シルヴィの父親に「人間になりたい」と父なる神に懇願する時に助けて欲しいと頼み込んだ過去がある。

そしてシルヴィが生まれる時、白銀の父親は「この子を見守ってほしい」と言い残し天界に連れ戻された。

今でもイバラの牢獄に幽閉されているのだろう。

シルヴィはルシフェルを崇拜する『サタニスト』たちの手によって、その悪魔を召喚させるために利用されかけた。彼らの活躍でサタニストたちの計画を阻止出来た訳である。

説明がやたら長くなってしまったが、彼らがいるのは観光惑星『ルジラドリトア』

未だ原住民が平和に暮らす惑星だ。とはいえ観光客相手にしてい

る原住民も少なくはなく、そのままの生活をしている地区と観光案内をしている原住民の血を引く人たちが暮らす地区が自然と区切られる事となった。

「で、ルジランの集落には行くの？」

「俺が来たかった訳じゃねえ……」

白銀は眉間にしわを寄せてデイランの問いかけに応えた。

この惑星は今までも何度が訪れているし集落にも行った。現状ではさして目新しいものも無いのに、どうして俺が希望した事になってるんだ……

「おい、その一団」

「！」

ふいに後ろから声をかけられる。振り返ると地球人らしい男たちが重々しく口を引き結んで白銀たちに目を向けている。

「何か用か？」

白銀が怪訝な表情を浮かべると声をかけてきた男がおもむろに懷から何かの画像を出してきた。

「この男を捜している。見かけなかったか？」

「……知らないな」

渡された画像を見たあとそう応えながら返した白銀。

「本当か？」

「嘘じゃない」

画像の人物は金髪のショートヘアに鮮やかな緑色の瞳の青年だった。地球人のようだが確かに見た事の無い人物だ。外見は同じような年格好に感じた。

暗めのスーツを着た男たちは、それを聞くと足早に去っていく。

「なんだったんだ？」とデイラン。

「さあな」

白銀たちは宇宙港に戻り自分たちの船に乗り込んだ。

個人が持つには大型の宇宙船。やや無骨な造りだが完全オーダーメイドの白銀の宇宙船は彼が決まった住居を持っていない事を窺わ

せる。

「次はどこいく？」

ディランが操縦席の隣のシートに腰掛けながら問いかけた。
今の処、白銀の仕事を全員でこなしていくという形になっている。
かなりの大所帯なため白銀たちは割と有名人となっていた。

「！」

出航しようとした白銀の宇宙船に管制塔から停止命令が出た。

「おい、どういう事なんだ？」

白銀は管制塔に向けて言葉を発した。

「くすまない、ルジランたちが騒いでいてね。少し待ってくれないか？
スピーカーから響く声に白銀は溜息を吐き出す。

「どうしたんだろうね？」

呑気にディランが口を開くと白銀は理由を聞くために管制室に足を運んだ。

「どういう事なんだ？」

色んな姿形をした種族がいる管制室で白銀はそのリーダーを問い質した。1つ目の管制室長は肩をすくめて説明する。

* 前兆

「どうもこうもルジランたちが『Dybbukが出た』ってエラく騒ぐからむやみに刺激しないように出航は控えてほしいんだよ」

紫の肌をかきむしって管制室長のルークはめんどくさそうに応えた。

「……ディバック？　なんだそりゃ」

「ルジランたちの言葉じゃないが」

「ああ、そいつは地球語だ」

因みに今、白銀たちが喋っているのはこの星域一帯の公用語だ。星域により公用語が異なる。ついでに言えば白銀はルジランの言葉がある程度は理解出来る。

しかし彼らの文化までは理解している訳ではない。

「で、その『ディバックが現れたら世界は崩壊する』ってえい言うい伝えがあつてだな……」

「悪霊の1匹でか？　冗談言つなよ」

「まあ、なんてーか。いつの間にかDybbukが原住民の伝説の化け物の名前になっちまっててね」

「どんな奴なんだ？」

「伝説ではあゝ……」

ルークは思い出そうとするように1つ目をやや上に向け話し出した。

「死を恐れず、敵に向かって果敢に戦い叩きのめす。一切の慈悲も無く、その緑の瞳を輝かせる。だったかな？」

「……緑の目？」

眉をひそめた白銀にルークはプラプラと手を振った。

「あールジランたちには明るい緑は良くない象徴なんだとさ」

「へえ」

てな訳だからさ、もうちょっと待っててくれよ。とルークに言わ

れ仕方なく船に戻る白銀。

事情を話すとディランたちも納得し溜息混じりに各々が自由にした。

「しかし、なんだって突然そんな化け物が出たなどと騒ぎ出したのじゃ？」

ナナンの疑問に白銀も確かにそうだと思った。

白銀は操縦席からルークに訊ねてみる。すると――

<仲間が狩りの最中に森の中でその瞳の影を見つけたんだとさ>
この惑星の獣には緑の目の動物は存在しない。ましてや原住民の狩り場に他星の人間が踏み込むとは思えない。

ルジランたちは地球人に似た容姿をしているがその瞳は薄紫なのだ。この惑星の成分が緑の瞳を生み出さないらしい。

実際、行方不明者の報告もないのだ。「すぐに落ち着くだろう」とルークが言って通信を切った。

3時間ほどしてルジランたちが落ち着いたらしく出航の許可が出る。

「やれやれ……」

白銀は船のエンジンを起動させ、向かって左隣の副操縦席にディランが座りルジラドリトアをあとにした。

思わぬ乗客

「……？」

「どうしたシルヴィ」

リビングルームでコーヒーを傾けながらパネルを眺めて首をかしげる白銀にナナンがいぶかしげに問いかけた。

今はエンジンを停止させ宇宙を漂っている状態だ。

「いや……何故か船の総重量が人間1人分多い気がする」

白銀が見ているのは船の端末だ。持ち運べるようになっていて船の色々を確認している最中である。

「密航者でもいるのかな？」

しれっとデイランが言ったが白銀とナナンとリヤム力は顔を見合わせた。密航者が乗り込んだとすればルジラドリトアしか無い。

悪霊騒ぎのあった惑星と密航者……気持ちの良い想像は出来ない。

「！？」

突然、船がガクンと揺れて警告音が鳴り響いた。

* 予期せぬ展開

「なんだ？」

白銀は慌ててリビングルームにある通信端末に駆け寄った。

< その船、ハッチを開ける >

男の声だ。威圧感を放ち強制的に発する。

「どういった理由か教えてもらいたい」

< …… >

応えない相手に白銀は眉をひそめた。どうやら何か厄介ごとらしい。ディランは白銀の目に無言でコクピットに向かう。

< ハッチを開かないつもりなら無理矢理にでも入るぞ >

「やれるものならやってみろ」

白銀はそう言って通信を切りコクピットに向かった。

「だ、大丈夫なのか？」

「どうだかな。レーザーケーブルのレベル次第か」

心配そうについてくるナナンに応えながら白銀は軽く舌打ちする。

「どうだ？」

操縦席に座っているディランに訊ねる白銀。ディランは苦い顔をした。

「レーザーケーブルのレベルは20。ちよいと難しいな」

「！ いいモノ持つてるって事か」

ディスプレイに映し出された相手の灰色の船を眺めて再び喉の奥から舌打ちする。そしてレーザーの照準シートに乱暴に腰掛け目を閉じた。

「準備をしておけ」

それを見たナナンがディランに指示する。

「……」

眉間にしわを寄せ白銀は集中した。すると――

「！ よし、飛ばすぞ！」

固定されていたレーザーケーブルが消えディランはエンジン全開で飛ばした。

「!?!? なんだと!?!?」

乗り込む準備をしていた男たちは一目散に離れていった船を呆然と見送った。

「はあ……」

「よくやった」

疲れてシートに背中を預けている白銀にナナンがポンと肩を叩く。一同はリビングルームに集まり今回の件について話し合った。

「ルジラドリトアから全ては始まっているようだな」

リヤム力は腕を組んで壁にもたれかかり応える。

「戻ってみる?」

「……」

ディランの提案に白銀は少し考え込んだ。

「でもさ」

カーセドニツク人のエイルクがそれに横やりを入れる。

「追いかけてきたって事はルジラドリトアにはそれが無かったって事なんじゃないの?」

「! なるほど」

ナナンは納得するように口を開いた。

「追いかけてきたって事はこの船にそれがあるって事?」

「……」

ディランの言葉にみんなは嫌な予感を浮かべつつ互いに顔を見合わせる。

「俺の船にあるとは限らないだろ。あの時、船は何隻もいた」

「じゃあ、奴らはその時にいた船を片っ端から強制搜索してるって事かい?」

「多分そうだろう。港にいた船のリストは隠すようなものじゃないからな、簡単に教えてもらえる」

「そうだよ。オイラたちが特別な人間なら秘密にしてくれるんだろうけど」

「とにかく、また奴らが襲ってくるとも限らない。警戒はしておこう」

溜息混じりに白銀が言ってひとまず話し合いは終わった。

「ホント、シルヴィといるとタイクツしないよねえ」

エンジンルームでエンジンの点検を行いながらデイルンはぼそりとつぶやいた。

白銀とは幼なじみだが、彼が『エナジー・ブレイン』だと知ったのはつい最近の事だ。簡単に信じられるような事でもないし危険な事にも巻き込まれるかもしれない。

という彼らしい気遣いだったのだろう。デイルンは呑気で楽観的な性格だ。その事実を知っても大した驚きはなかった。

どちらかといえば天使の子どもだった事の方が驚愕である。

銀河連邦で運転手かデスクワークにいた時よりも、今は何倍も充実していた。彼は大型船舶免許も持っているのだ。白銀にとってはこのうえもなく助けになる親友である。

その運転技術も素晴らしく、操縦を任せていられる程だ。

「異常な〜し」

と、目の前の大きなパイプをコン！と叩いた。

「……」

「……」

そこにいた青年と目が合う。見慣れない顔だ。

「こんにちは」

「やあ」

デイルンはどう反応していいものか悩み挨拶が口を突いて出た。

青年はそれに普通に挨拶を返すのだった……

* シップチェイス

「エンジンルームにいたあ!？」

白銀はリビングルームに呼ばれて、ディランから説明を受けながら目の前にいる青年を示された。

この顔は覚えている。あいつらに見せられた画像の男だ。

「……名前は？」

「ベリル」

そう名乗った青年は悪びれる様子も無くそこにいる一同を確認するように一瞥していった。

「面白い取り合わせだな」

ベリルはそう言って微笑んだ。白銀はそんなベリルに睨みを利かせ少し上から見下ろす。

「どうして俺の船にいる」

「目の前にあったから」

度胸の据わった答えだ。白銀は半ばあつけにとられた。

「おぬし、地球人かな？」

「うむ」

ナナンは何故か物珍しそうにベリルをマジマジと見上げている。

「ジイさん、どうした？」

白銀は怪訝な表情を浮かべて不思議そうにベリルを見つめるナンンに問いかけた。

「シルヴィよく見てみるんじゃ。この者、面白いオーラを持つとる」

「! 何？」

言われてベリルを見つめる。その様子にベリルは思い出したような声を上げた。

「! ああ……スナイプ人は生まれついでのエナジー・ブレインだったな」

「あんた……何者だ？」

白銀はようやくベリルに興味を持った。そんな白銀にベリルは薄く笑っただけだ。

「どういう事？」

ディランとエイルクは意味が解らなくて首をかしげる。

「お前たちには解らんじやろうが、この者のオーラは変わっておる。なんというか……」

「俺たちに似てるんだ」

「似てるってエナジー・ブレインに？」

白銀たちの持つオーラは一般人とは少々、異なった形と色をしている。

「見たところおぬしにはエナジー・ブレインとしての能力は無いようだ」

「うむ。その通りだ」

「追われている事と関係あるのか？」

白銀が相手の反応を確かめるようにゆっくりと発した。

「……」

ベリルは少し視線を外し目を細める。

「話さないつもりなら宇宙に放り出す」

「出来るのか？」

しれっと問いかけるベリルに白銀は「うぐっ」と声を詰まらせた。よほどの事じゃない限り宇宙に人間を放り出す事が出来る者はいない。

「とりあえず！ 追われているのはあんたで合ってるんだな？」

白銀の質問にベリルは無言で頷いた。

「近くの惑星で降ろす。あとは勝手にしろ」

白銀はそう言ってコクピットに向かった。その後ろ姿をベリルは無言で見送る。

「ふむ」

青年は思案するように小さく唸った。

「近くの惑星は……」

白銀がベリルを降ろす惑星を探していた時――

「！？」

再び警告音が船内に響き渡った。船外カメラに映されたものは先ほどレーザーケーブルで白銀の船を固定した船だ。

「追いかけてきてやがったのか」

「シルヴィー！」

ディランが慌ててコクピットに入ってきた。

「操縦を頼む！」

言って白銀はレーザー砲のシートに移る。

「撃つて来たぞ！」

「気合いで避ける」

レーザー砲を起動させ白銀はトリガーに手をかけ静かに目を閉じる。白銀の力は主に癒しの力だが時として己の意志で変化させる事が出来るのだ。

エイルクとリヤム力はそれぞれの船の上下にあるビーム砲に向かった。

白銀が目を閉じたままレーザー砲の引鉄ひきがねを引くとその軌道は追ってくる船に向かって弧を描くように走っていく。

「！　だめだ。相手のシールドが強すぎる。もっと接近して撃たないと」とディラン。

「バカいえ！　これ以上の接近はこっちにも大きな被害が出る」

相手の船は中型船だがこちらよりも多くの武装をしている事は明らかだった。

ハイバードライヴ
「短距離HDは可能か？」

「えっ！？」

2人の間に突然別の声。振り返るとベリルが後ろに立っていた。

「何か策でもあるかの？」

後ろのシートにベルトを締めて座っていたナナンが問いかける。

「奴らの船は小回りは利くが操縦士はお前ほどの腕は無い。短距離

移動で後ろに付く事が可能だ」

「この船でそんな芸当しろって!？」

ディランが声を張り上げた。

「私がサポートにつく」

言って副操縦席に腰を落としたベリル。シートベルトを締め不安げなディランを一瞥した。

ベリルはこの船を熟知しているようにボタンを素早く押していく。

「下にいるのは誰だ」

<オイラだよ>

「左に照準を合わせておけ」

<え、なんで?>

「上はリヤム力だな」

<うむ>

「照準は10時の方向だ」

<了解した>

「ディラン、私が合図したらHDを」

ベリルは言いながら座標を入力した。

「……」

テキパキと指示をくだしていくベリルを啞然と見つめてディランは開き直ったように目を吊り上げる。

「やってやるうじゃない!」

「それでいい」

相手の攻撃に当たらないように船を動かしその時を待つ――

「セット」

「!」

ディランはHDのスイッチに指をあてた。

「アップ」

ベリルの言葉にHDのボタンを押す。

争奪戦

「ぐっ……」

一瞬の圧迫感。

「！ HDだと！？ 出てくる座標を確認しろ！」

長距離HDに気がつかなかったとは……相手の船のリーダーは薄れていく大型船を見つめて奥歯を噛みしめた。
しかし――

「！？ 約4時の方向に出現！」

「なんだと！？」

灰色の船を視界に捉えベリルは静かに発する。

「一斉攻撃」

<きつ、きさまの入れ知恵か！？ ベリル・レジデントおー！>

悲痛な叫びが通信に入り相手の船は火花を散らしながら遠ざかっていった。

「……勝っちゃった」

静まりかえった空間でディランが呆然とつぶやく。

「あんた……何者だ？」

薄笑いを浮かべているベリルに白銀はいぶかしげな表情を浮かべた。

*何者だ？

船の修理を行うため白銀たちは近くの惑星『トルコメシヤス』に向かう。

トルコメシヤスは工業惑星だ。人件費が安いいため色んな工場がひしめき合っている。

「ムルス力港に降りてくれ」

「！ 知り合いでもいるのか？」

「うむ。そこなら格安で修理をしてもらえるだろう」

白銀は半ば疑いながらもムルス力港に進路を取った。

「ベリル！ 久しぶりじゃないか」

ガタイの良い男がベリルを見つけて笑顔で近づく。

ムルス力港にほど近い個人の修理工場に白銀たちは来ていた。大型船を収納できる規模の個人の修理工場は珍しい。

「！」

ベリルに声をかけてきた男の顔と肌に白銀は目を見張った。薄青い肌と部分的に鱗状になっている腕。そして白目の無い瞳は銀色だ。

「わゝウォーテリア人だね」

ディランが珍しそうにその男を眺める。男は怒った素振りも見せず豪快に笑った。

「わっはっはっ、珍しいだろう」

「うん、肌とか水色で綺麗だね」

水上惑星『ウォーテリア』に住む種族。総人口がきわめて少なく人見知りの激しい人種なのだ。

その中でもこうして外の世界に出て暮らしている者も多くはない。セピア色の髪をかき上げ男はベリルに向き直った。

「修理か？」

「うむ。よろしく頼む」

男はまくつていたつなぎの腕を戻し船に向かった。ディランがそれについていく。

「セレンは腕が良い」

心配そうに後ろ姿を見ていた白銀にベリルは安心させるように発した。

「俺はどっちかっていうとあんたの方が心配だけどね」

「……」

その言葉にゆっくりと視線を外すベリル。

「ほう、こいつは整備がしっかりしてる船だな」

「俺がいつも点検してるからね」

エンジンルームでセレンとディランは機械を眺めて語り合う。

「こいつは凄いエンジンだな。個人で持つには余りあるんじゃないか？」

「整備が大変なんだよねえこれ」

「若いのにやるじゃねえか」

褒められて照れるディラン。機械いじりは好きなので彼は自発的に船のエンジンなどの整備を行っていた。

こんな大型の船はなかなか個人ではお目にかかれないシロモノでもあるからだ。

「彼とは友達？」

ディランがさりげなく訊ねてみた。セレンはさして怪訝にも思わず答える。

「おう！ あいつとは30年前からの親友さあ」

「は……？」

「オレもあの頃はまだ若くてイカしてたんだぜ」

いや、そこん処はどうでもいいんだけど……俺の聞き間違いだったのか？ ディランは聞き返す事も出来ずにセレンの若かりし日の話を聞かされるのだった。

「シルヴェスタ」

「！」

呼ばれて振り返る。工場内を見て回っていた白銀にベリルが何かを投げつけた。それを上手く受け取ると手の中にある物体に目を通す。

「なんだこれは？」

「そいつが追われている理由だよ」

「！」

言われて再び見つめる。手にすっぽりと収まるサイズは長方形で鈍い銀色をしていた。

「そいつが完成し設計図を破棄して逃げてきた」

「！ あんたもそこにいたって事か？」

「正確には捕まっていた」

私は別の理由でね。とベリルは付け加えた。

「奴らは『死の商人』だ」

「！ じゃあこれは……」

「そいつ1つでお前の船は木っ端微塵になる」

「！？」

白銀は驚いて物体と自分の船を交互に見た。

修理場所を確認し船から出てきたセレンは白銀に大体の見積もりを述べる。

「！ 確かに格安だな」

「ベリルの知り合いなら当然さ」

「俺も修理手伝うよ」

デイランが親指で自分を指して応えた。

「武器を見せてくれ」

「おう！」

ベリルがそう言うのとセレンはみんなを案内する。

「！」

ベリル以外の全員がその光景に目を丸くした。工場内の一角に金属の壁で囲まれた部屋がありそこに入ると天井高くまで携帯武器の数々が並べられていた。

「なんだこりゃ……」

白銀は開いた口がふさがらない。そんな白銀にベリルは笑って応える。

「彼は傭兵専用の武器商人なんだよ」

「！ 傭兵？」

ぴくりとリヤムカが反応しベリルを見やった。その態度にセレンは首をかしげる。

「あれ？ こいつらお前のこと知らないのか？」

ベリルは薄笑いで肩をすくめた。

「じゃあ、マクロディアンって事も？」

「マクロディアンじゃと！？」

ナナンは声を張り上げた。そして押しのけるようにベリルの前に駆け寄り驚愕の瞳で見上げる。

「本当におぬしはマクロディアンなのか……？」

ベリルはそれにニコリと微笑んだ。

「『マクロディアン』って何？」

意味の解らないディランはナナンの様子に怪訝な表情を浮かべる。そんな彼に白銀はベリルを見つめて応えた。

「……不死者の事だ」

「えっ！？ なにそれ！？」

「死なないの？」とエイルク。

「私もマクロディアンは初めて見る」

広い宇宙、寿命のない種族も存在するが地球人で不死者など珍しい以外の何者でもない。

しかも……

「寿命が無いんじゃないかって完全な不死だって！？」

白銀とナナンはさらに驚いた。

「なんだ、何にも知らなかったのかよ」

「言ってなかったからな」

言いながらベリルは武器を手にとって確認していく。

本来の不死とは寿命を持たないだけで事故や何かの事で死に至るものだ。しかしベリルのそれは常識を逸脱している。

「どれくらい生きとるんじゃ？」

「さあ、どれくらいかな」

ナナンの質問にとぼけて返す。

「言っておくが、不死だから傭兵という訳ではないよ。死ななくても痛いものは痛いからね」

そしていくつかの武器をみつくりいセレンに手渡した。それを確認し頷いて再びベリルに返す。

光を収束して撃つ『ラインガン』2挺に『電磁ナイフ』ふたふり。

相手を気絶させるほどの電流を流す『ショックライザー』を1つ。

ホルスター（収納ベルト）を腰に装着し仕舞っていく。

* なしくずし

「セレン」

「ん？」

振り返った男にベリルは口の端をつり上げた。

「この近くに『広い場所』はあるか？」

「……南100kmに廃墟がある」

「！ 何をするつもりなんだ」

雰囲気が変わったベリルとセレンに白銀が問いかける。

「逃げ続ける訳にもいかんのでね」

「1人で戦うつもりか」

リヤム力は呆れたように発した。ベリルはニヤリと笑みを浮かべ口を開く。

「武器の設計図は破棄し科学者たちも解放した。私の手元にある唯一の商品を大切に持ち帰りたいだろう」

相手は手荒なことが出来ない事を踏まえたうえでの戦闘。それでもたった1人で迎え撃つ度胸には感心する。

ベリルは他に3つほどの武器とバッテリーやらを選びセレンにクレジットカードを手渡した。

「迷惑をかけたな」

白銀たちに言って工場のわきに止めてある反重力バイクに足向ける。

「……」

白銀たちは互いに顔を見合わせた。

「はあ……」

大きな溜息と共に白銀はベリルに歩み寄った。

「おい」

「ん？」

バイクにまたがってエンジンをかけようとしたベリルを呼び止める。

「……20万でどうだ」

「そんな程度でいいのか？」

返ってきた意外な言葉に白銀は一瞬、声を詰まらせた。

「何人だ？」

「え？」

訊かれてみんなの方を振り返る。いち依頼に付き20万で言ったんだが、20万×人数で計算しているのか……？

「この件は20万では安すぎる」

「全員分払えるっていうのか」

それにベリルは指ぬきグローブをはめながら応えた。

「誰が受けるか話し合ってくれ」

「えっ！？ 1人20万クレジットも出してくれるって？」

「すげーじゃん！」

「どうするのじゃ？」

「どうするも、受けたい奴は言ってくれ」
「すかさず全員が手を挙げる。」

「危険だぞ」

「今更だな」

「そうそう」

「楽しそうじゃん」

「決まりじゃ」

「100万だな。前金で渡す」

決を取って戻ってきた白銀にベリルはしれっとクレジットカードを手渡した。

「……」

「長く生きているのですね。それなりに金はある」

ベリルは怪訝な表情を浮かべる白銀に薄く笑った。

「それなら構わないが……」

「20分で準備しろ」

白銀たちは各々、戦闘の準備を始めた。

たった今いただいた金でセレンから武器を買う。セレンにとっては嬉しい事だ。

「！」

ベリルが白銀に何か渡した。それは通信機だ。耳に装着するタイプですっぽりと収まる。

「設定はしてある」

全員がそれを耳に装着し準備は整った。ベリルはバイクにまたがり白銀たちは小型艇に乗り込む。

「ベリル」

「！」

セレンから何かを投げ渡される。

「せんべつだ」

サンクス
「thanks」

肩に背負っている1mほどのレーザーライフルに取り付ける。ブースターパックだ。威力と射程^{レンジ}範囲が伸びる。

反重力バイクを起動させるとフワリと浮いた。白銀たちの乗る小型艇を一瞥して工場をあとにした。

「どういった兵器なんだ？」

白銀がヘッドセットでベリルと会話する。見せて貰った爆弾について問いかけた。

<さあな。詳細は解らんが反物質を利用したものらしい>

「そりゃまた危険なシロモノだなあ」

ディランが呑気に応えた。

「しかし接触する物質の質量によって規模も変化するのだろうか？」

そもそもぶつかる前の段階で大気に触れて消滅するものをどうやって爆発物に転用出来たのだ」

リヤム力はもつともな疑問を口にした。

<反物質の周囲に特殊なシールドを張る事で接触を防いでいるらしい。目標物に接触させるシステムは私にも解らん>

「！ お出ましのようだよ」

「！」

<！>

ディランがディスプレイに映し出された影に発する。

白銀たちの乗る小型艇よりもひとまわりほど大きい輸送機が200mほど後ろから迫ってきていた。

「チッ」

白銀は敵の武装を確認するためディランの隣のシートに乱暴に腰を落としてコントロールパネルをいじり始めた。

<どうだ？>

「大した武器は装備してないようだ」

「船での攻撃を目的としてないって事か」

「牽制程度でバイクを落とす気かな？」

「じゃあこつちも牽制だ」

ディランがそう言うといイルクとリヤム力は後ろにあるレーザーザーに向かった。

<シールドだけは良いものを使っていると見た。同じ場所を狙え>
ベリルは言ってバイクを自動操縦に設定しライフルを手にする。

出力を最大にして敵の輸送機に照準を合わせた。当たればデカイが外れればバッテリー切れでさっそく武器が1つ無駄になる。

「……」

攻防を繰り返している上空の2隻の船を左目で視界全体に捉え右
レーザーサイト
目の照準は敵の船に――

「！」

エイルクの目に下から敵に向かった閃光が見事に相手の船に命中

した光景が映る。

「当たった！ すげー！」

<油断するな。これで終わりではない>

煙を吹き出しながら遠ざかる敵の輸送機を一瞥しベリルはポイとバッテリー切れのライフルを投げ捨てた。

D y b b u k - デイバック -

「！」

しばらくして荒れ果てた廃墟が目に見え込んだ。崩れた建物が散在し戦うにはうってつけの情景にベリルはニヤリと笑みを浮かべる。

「お前たちは船を停止させて待機しろ」
言ってベリルは廃墟を走り回った。

「？ 何をしてるんだ？」

上空からその様子を見ていたデイランと白銀が首をかしげる。

「畏でも仕掛けてるんじゃないか？」

リヤム力の言葉で傭兵だという事を思い出した。

「あの人って何歳なんだろうね」

時間を持てあましていたエイルクがぼそりとつぶやく。

「マクロディ안의事は聞いた話だが、感情の起伏がほとんど無いという話だ」

「！ え、そんな風には見えないけど」

デイランは意外な顔をして聞き返すように発した。

*戦況、いちじるしく不安

「私が聞いたのはあくまでもマクロディアンとしての種族の話だ。奴は地球人で元々はマクロディアンではなかったと言っていただろう」

「ああ、25歳の時に不死になったとか言っていたな」

「50歳でなつてたら50歳の見た目だったんだね」とエイルク。「死にかけのジイサンの時に不死になつてたら最悪だよな」

「そもそも死にかけのジイにどうやったら不死になる偶然があるんだよ」

ディランの言葉に白銀が呆れて目を据わらせる。

<聞こえてるぞ>

「あ、聞こえてた？」

ディランがペロリと舌を出す。

<そろそろ来る頃だ、戦闘態勢に入っておけ>

「やたら場数を踏んでるな」

リヤム力はベリルの動きに唸った。そんじょそこらの兵士の身のこなしじゃない。

「てコトは相当なおジイさんなのかな？」

<その話は後にしろ……>

そうこうしている間に数機の小型艇が遠くの方で降り立った。

<相手はおよそ30人。引き締めていけ>

「30人！？ 多くない？」

驚くディラン。確かにベリル1人を相手に30人というのは多すぎる気がする。

<予定通りの数だ>

どんな予定立ててんだよ……白銀たちは心の中でツツコミを入れた。

<私が奴らを攪乱^{かくらん}する。お前たちは2人一組で目の前に来たら攻撃しろ。私を撃つなよ>

言っですぐ叫び声と戦っている音が響いた。

「わっ！？ もう始まってんの？」

エイルクは慌ててラインガンの安全装置を外した。

「行くよ」

デイランがいつもとは違った無表情な顔でエイルクを促す。さすがは元銀河連邦員だ、いざという時は冷静になる。

白銀はラインガンを片手に1人で駆ける。リヤマ力は師であるナナンからは絶対に離れないので白銀が単独になるのだ。

<大体の位置を教えてくれ>

「俺は多分あんたから西にいる」

<オイラたちは東だと思おう>

<我々は北だ>

「解った。そこから動くなよ」

聞いて大体の位置を把握しペロリと唇を軽く舐めて駆け出した。

すでに5人倒して縛り上げてある。残りは25人ほど……全てを相手にしていたらこちらの武器が底を突く。

<西に5人、誘導する>

「解った」

白銀はいつ敵の影が見えてもいのように銃を構えて辺りを窺った。

「！ 音が近くなってきた」

<注意しろ>

“ドカン！”

「！ なんだ今の音は？」

すぐ側で聞こえた爆音に白銀は一瞬、体を強ばらせた。

<トラップにひっかった。3人だ>

2人倒したのか…… あっけにとられながらも白銀は目の前に出て

きた影に引鉄ひきがねを引いた。

<東に4人、誘導する>

「わっ！？ こっち来んの！？」

エイルクは慌てて銃を握りしめる。そんな少年に肩をディランはポンと叩いた。

「大丈夫だよ」

「……うん」

“ドカア！”

「！？ なにっ？」

<1人だ>

「3人ひっかつたのね」

「！」

「わああ！？」

構えていたディランたちにその影は引鉄を引いた。

しかし、半鉱石のエイルクの体はその光を乱反射させ無効にした。すかさずディランが男の足に命中させる。

「相変わらずその体いいよね」

「変な褒め方しないでよ！」

盾にされたエイルクは半泣きで訴える。初めからオイラを盾にするつもりだったんだ……と、のほほんとしているディランを睨み付けた。

「こちらに何人、誘導するんだ？」

次に指示されるだろうリヤム力が先に訊ねる。

<上から見たと思うが、少し拓けた場所があつたろう。そこに集まってくれ>

リヤム力たちの位置からほど近い距離に言われた場所がある。

<リヤム力がまず先行し、鉢合わせした奴らをよろしく頼む>

「よし！ ゴーゴーじゃ！」

「お師さま！？ 1人で行かないでください！」

嬉々として駆け出すナナンをリヤム力は慌てて追いかけた。

さすが屈強な精神と肉体のリヤム力。出会う敵をことごとく倒していく。それをナナンが手際よく縛り上げていくという流れだ。

「!?」

拓けた場所に全員が同時にたどり着いた。

「ベリル！」

残った敵は6人。その中の男が声を張り上げた。

「やあ、オレオ。元気そうで」

しれっと軽く左手を挙げたベリルにオレオと呼ばれた男は鋭い眼差しを向ける。

「大人しくしていたらどうなんだ。キサマはすでに終わった存在だろうが！」

「そんな事は他人が決める事ではない。引退なんてガラじゃないね」
ベリルは肩をすくめて睨み続けるオレオを見やった。

「デイベック
Dybbukめ……」

「昔から色んな呼ばれ方をしてきたが、とうとう死人の霊になったか」

とぼけて言ったあとベリルは口の端をつり上げてゾクリとする目をオレオに向けた。

「今頃は銀河連邦が『惑星ナルシチェ』に向かっている」

「!? なんだと!？」

「根本的な解決だろう？」

薄笑いで言い放ったベリルを呆然と見つめてオレオはがっくりとへたり込んだ。

「ナルシチェってどんな星？」

エイルクは小声で白銀に訊ねた。

「この銀河の端にある辺境の惑星で犯罪組織が隠れている処だ」

「言う処の犯罪惑星だね」とデイルン。

犯罪組織が横行している惑星だが大々的に摘発は出来ない理由がいくつかある。今回の件に関していえばその摘発を行える状況にあ

ったという事だろう。

絶望的な表情を浮かべるオレオと残り5人を縛り上げベリルはこの街の警察に連絡した。

「終わったあゝ」

ようやくの解決にエイルクは安堵して溜息を吐き出す。

「ご苦労さん」

ベリルはニコリと笑って労をねぎらった。

*オチ

「ベリル！ アレは素晴らしい発明なんだぞ……それを闇に葬るつもりなのか」

「素晴らしい？ 制御も出来ないシロモノがか？ かつての核もそうだったとかいう話は聞かんぞ」

ベリルは銀色の物体を取り出した。

「！ そつ、それを渡せ！」

「嫌だね」

ニヤリと微笑みポンと真上に放り投げる。

「！？」

オレオは縛り上げられた体で必死にそれを目で追った。

ベリルはラインガンを引き抜き見上げる事もなく引鉄を引く。

「！？ やめろ！」

銀色の物体はその光に弾かれるようにくると回る。続けて3発、当たって物体は見事に砕け散った。

「なんてことを……っ」

オレオは降ってくる小さな残骸にガックリと肩を落とした。

「ば、爆発しないんだね……」

エイルクがビクビクしながら言うのとベリルは淡々と説明した。

「正しい方法でなければ爆発しないんだよ、こういうシロモノはね」
「引き上げよう」

白銀がみんなを小型艇に促す。出来れば警察関係とは関わりたくない。

ベリルは乗ってきた反重力バイクにまたがり小型艇の後部を確認して追いかける。

「かつては仲間だったんだかな……」>

「！」

ヘッドセットからベリルの小さな声が白銀の耳に響いた。

足を踏み外した仲間を、彼はどんな気持ちで捕らえたのだろうか

……白銀は目を細めた。

「ねえ、今いくつなの？」

「気にするような性格でもないよね」

エイルクとデイランはヘッドセットを装着しベリルを問い詰める。

<何故そんなに知りたがる……>

「わしも知りたい」

「お師さま……」

困ったような声のベリルに白銀はクスツと笑った。彼のそんな様子は初めて見た気がする。

<お前たちが想像するような歳ではないぞ……>

セレンの工場に到着してもエイルクたちはベリルに張り付いていた。

「デイラン！ 修理手伝いするんだろ？」

「あつ……と、そうだった」

白銀に言われてデイランは慌ててエンジンルームに向かう。エイルクは「面白そうだ」とデイランについていった。

「ベリル」

「ん？」

落ち着いたようにバイクにもたれかかっているベリルに白銀は声をかける。

「これからどうするんだ？」

「さてね」

一度、目を閉じて少し顔を伏せたあとベリルは工場の外に目を移した。

「行きたい処はいくらでもある」

「！」

穏やかなエメラルドの瞳に白銀も外を見る。

「もし何かあれば仲介屋に私の名を出せば良い」

「！」

振り返るとベリルがバイクにまたがっていた。

「おいっベリル!？」

ベリルは右手で軽く別れの挨拶をして走り去った。

「えっ行っちゃったの？」

残念そうにつぶやくエイルク。好奇心旺盛な少年には、この上もなく面白い相手だったのかもしれない。

何故かナナンも同じくらい残念そうにしているが……人間になつてから生まれ変わってもその記憶を消してくれない神様に多少の腹立たしさを持つナナンにとって、ベリルとはどこか共通する意識があるのかもしれない。

もうすぐ修理の終る船のリビングルームで白銀はそんなみんなの様子に微笑みながら端末をいじる。

「何を見ておるのじゃ？」

ナナンのぞき込む。

「ん？ ルジラドリトアの言い伝えについてね」

「おお、そういうえ彼が面白い事を言うとな」

「！　どんな？」

「元々はルジランの『緑の怪物』という名前がディバックにすぎ変わったんじゃが。彼があ星に來たせいだとか」

「……」

つまり、過去にあの星で何かしでかしたんだな……

「！　ちよつと待て」

「なんじゃ？」

白銀はディスプレイに映し出された文字を凝視した。

「その名前に変わったのは2000年以上前だぞ……」

「なにっ!？」

ナナンは、ガバツ！　と端末に張り付いて文字を追う。

「……あやつは本当に何歳なんじゃ？」

「知らない方がいい気がする」

＜あいつに会ったのか＞

「あいつを知ってたのか」

修理の済んだ宇宙船で次の惑星を目指す白銀は仲介屋と通信を交わす。

＜すまん、ある程度は秘密にしておかないといけない事柄なんですね。あいつがそう言ったんならあんたたちには何も隠す必要はなくなつた訳だ＞

ディスプレイに映し出されている3つ目の男がニヤリと笑った。

「あいつは何歳なんだ？」

＜それはオレも知らないよ＞

「そうか……」

白銀は小さく溜息を漏らす。

＜ウワサじゃあ、地球の宇宙開拓以前から生きてるって話だがね＞

「バカいえ！ それだと7000年以上は生きてる事になる」

＜だからウワサだつて＞

「……」

通信を切つて白銀は1人コクピットで唸った。

「D y b b u k ……？ そんな生やさしい奴か？」

今更に白銀はベリルの事を思い起こし小さく発した。

「あいつには……」

『悪魔』

が一番ふさわしい――

そんな白銀のつぶやきを知つてか知らずか彼は昔と変わらずしれつと宇宙を駆けめぐる。

彼を止められる者など果たして存在するのだろうか？

未来永劫そんな奴は現れないかもしれない。

E
N
D

***オチ（後書き）**

* いかげでしたでしょうか？

少しでも笑っていただけたなら幸いです（・ω・）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6939r/>

Dybbuk - ディバック -

2011年8月30日03時24分発行